

評価委員総合評価

研究課題名：(地方共同研究)フェーズドアレイレーダーを用いた顕著現象発生メカニズムに関する研究

評価委員

委員長：高野清治

委員：齊藤和雄、竹内義明、水野孝則、小泉耕、尾瀬智昭、高野功、高薮出、
鈴木修、前田憲二、山里平、倉賀野連、岡部来

評価日：平成 29 年 2 月 23 日（書面開催）

1. 総合評価

- 非常に優れた研究であった。
- 優れた研究であった。
- 研究を実施した意義はあった。
- 失敗であった。

2. 総合所見

大阪大学フェーズドアレイレーダーを中心とする観測領域で発生した顕著事例について、気象研究所・地方官署それぞれで解析を進め、顕著事例に対するフェーズドアレイレーダー観測の特徴や利活用についての考察がなされた。

明確な見通しを立てた上で、具体的な計画を立案し、地方官署と気象研究所が適切に役割分担し、当初想定以上の成果が得られた。

成果発表数も多く、報告書もまとめられており、地方共同研究の手本となるような研究であった。

調査の過程を段階に分けて無理なく実施していること、大きな研究テーマの流れの中にこの地方共同研究をきちんと位置付けて実施していることも、高く評価できる。

気象研でのフェーズドアレイレーダー導入を契機として、既存の気象ドップラーレーダーと組み合わせた顕著現象監視の更なる高度化のための研究が気象研・地方官署との総合的な協力体制により進められ、現象の発生メカニズムの解明、顕著現象データベースの整備、レーダーを活用した将来的な短時間予測技術の開発といったそれぞれの目標で十分な成果が得られた。

重要な現象である線状降水帯まで対象に含めて対応したことは、評価に値する。

最新のフェーズドアレイレーダーのデータの活用に加え、現象の解析を環境場～局地解析のレベルまで総合的に行われ、最終報告書の形でまとめられたことは極めて評価できる。

フェーズドアレイレーダー観測などによる顕著現象出現にかかわるデータベースの構築、そのデータベースを用いた現象の発生メカニズムの解析と理解、フェーズドアレイレーダーを用いた将来的な短時間予測技術のための提案、といった目標をそれぞれ達成しており、高く評価できる。

地方共同研究として実施したことにより、参加各官署の技術レベルの向上に繋が

ったものと思われる。

本研究は当初想定した以上の成果が得られた。研究目標の設定、研究体制について適切であったと判断できる。